

地域に根差したお寺を目指して

高橋法靖

現在、私の自坊、下野市妙光寺は師父が住職を務めておりますが、前住職が亡くなってから長いこと無住の状態です。隣町のご住職が代務をしてくださっていました。

師父が住職として入寺した当時の妙光寺は、南に数百メートルにあった昔の医師の屋敷を引き舞いで転がしてきたもので外観からしてお寺らしくなく、また相当古い建物でしたので床が抜けていたり、柱はぶら下がっていたりと、住めるような状態ではありませんでした。そのため、同県栃木市（旧岩舟町）にある妙龍教会から師父が車で四十〜五十分ほど掛けて週に一回程度、また、お盆やお彼岸など行事の時に通って世話をしておりました。私自身も妙龍教会において生を受け、幼少期を過ごしておりました。

平成二十二年より、妙光寺の再建計画が立ち上がり、浄財により本堂を建て直し、今まで無かった客殿、庫裡も新築し、ようやく私どもが住める状態になりました。

当時私は東京のお寺に勤めておりましたが、平成二十六年二月に加行所成満と落慶を機に妙光寺へ引っ越し、住職は教会を、私は寺をと仕事を分担制にして現在に至ります。

妙光寺は檀家の九割が農家で数も少なく、百軒にも満たない大変小さな田舎のお寺です。師父にも給料を払えないから帰ってくるなど言われていました。

そのため妻を外に働きに出して、私はゴミ出し、洗い物、掃除、洗濯、子どもの送迎を担当し、自坊の仕事と他の

お寺様のお仕事を頂いてなんとか生活しております。

数少ない檀家でこの度妙光寺を建て直すにあたり、一軒の寄付の負担が大きくなってしまいました。ではいざ、多額の寄付をした檀家さんがどうお寺を使うかというところ、年中行事はお会式、施餓鬼、星祭りの三つ、年に一〜二回の葬儀、それに伴う法事だけです。

言葉は適切ではないのは重々承知ですが、「だいぶコスパが悪いな」というのが自坊に入ってからすぐの率直な感想でした。

思いはそれぞれ、「ぼろぼろだし建て直したい」、「別にお寺に行かないしお金出したくない」、「子どもや孫の代で建て直すのは大変だから今のうちに」、「家のローン、車のローン、親の介護もあるのに寺に金取られた」とあったかと思えます。

しかし金額の大小、余裕の差はあれど決して安くはない額を寄付して、それに見合った活用をしているかということそうではない。

他に何かお寺を有効的に活用出来る方法は無いかと考え、檀家総会の時に

「お寺も新しくなったことだし、他のお寺さんみたいにほうろく灸や夏祭り、節分の豆まきなどやってみませんか?」

と檀家参加型の行事を提案してみました。栃木県でもかなり保守的な地域に加え、無住の状態が長く続いたため

「うちの寺は今のままでいい」、「行事が増えると大変だから」と固辞され、新たに行事を増やすことの困難さに直面しました。

お寺によって運営の仕方は様々だと思えますが、自坊では住職の権限で何かを始めることは出来ないし予算も組めないのです、また一年総会を待たなくてはなりませんでした。

一年様子を見たものの、やはりじっとしていられず、総会でまた提案をしてみました。

「お寺でヨガをやっているとところがあるので下見してきました。予算的にもうちでも出来そうです。月イチでヨガをやってみませんか？」

それでもやはり返答は芳しくありませんでしたが、なんとか洪々了承を得ることが出来ました。

現在施餓鬼などの行事に出てきている檀家の八割程度が男性です。他のお寺でもそうかもしれませんが、自坊でも先に男性が亡くなってしまいうケースが多いので、ご主人亡き後に行事に参加しやすくするため、女性が参加しやすいヨガにしました。

檀家だけでなく、近所の方やお友達、ママ友などにも声を掛け、回覧板や魚屋さんなどにチラシを置かせてもらって幅広く募集を掛けました。

田舎ならではのようですが、SNSではなく魚屋さんやパン屋さんなどチラシを置いて勝手に宣伝してもらうのが一番効果的だったような気がします。

先月の九月でちょうど三十回に達し、平均十人〜十五人ほどの常連の参加者で落ち着いておりますが、一時は私の母親と妻を入れて四人しかいないという時もありました。

最初こそ檀家の方も来てくれましたでしたが、結局は檀家一割でその他の方が九割といった具合になりました。

月一不定期開催でワンコイン九十分。ヨガといっても本格的なものではなく、年を取っても腰が曲がらないようになど体幹を鍛える老若男女出来るものをお願いします。最年長は九十歳のおばあさんですが今でもたまに参加してくれています。

ヨガを始める前に本堂を借りるということと、お釈迦さまの前でゴロゴロするので一読をしてお題目を唱え、五分程度の法話をしています。法話も日蓮宗に特化したものではなく、「なぜ法事・葬式をするのか」「なぜ塔婆をあげる

のか」「お盆とお彼岸の違い」など、身近な、「本当はこんな意味があるんだよ。」という通仏教的なことになっています。

一度唱題行も併せてやってみようかと思いましたが、講師と相談し、初参加の人がいた場合にはなかなかハードルが高いということで取りやめになりました。

ヨガも軌道に乗ってきたので、また一年待って総会の時に節分でのご祈祷と豆まきを提案し、無事に了承を得ました。これは完全無料にしました。

ただ豆を撒いても子どもはうれしくないのです、境内でお菓子も一緒に撒いてその中に当たりくじを入れ、景品と交換出来るようにしました。

一年目はほぼ檀家で三十人、二年目は四十人、三年目は百人にまで増えて地区の行事として認めてもらえるようになりました。

この二つの行事は完全赤字で一度も黒字になったことはありません。檀家役員に提示された予算で収まったことはないのです。檀家の自己負担です。

この二つの行事を新たに始めるだけでも檀家の説得に長い時間が掛かりました。田舎、保守的な地域ということもあり、なかなか理解が得られません。ただ、その分協力してもらえようととても心強かったように思えます。

三離れと言われ長いこと経ちますが、このままではいけないと思うお寺側と、今まで通りでいい、このままでいいと思う檀家側との意見のすり合せがポイントになるかと思えます。

自坊ではお盆の棚経のほかに春と秋のお彼岸もお経回りをしますが、お彼岸ではその日最後のお宅では一緒にご飯をご馳走になり、いろいろなお話をして帰るようにしています。先ほど三離れと申しましたが、実際には仏教的

要素から離れているというよりもすべてその根本には僧侶離れがあるかと考えております。自分自身と檀家との距離感はどうでしょうか。ご自坊の不満な点を言ってもらえる間柄でしょうか。

特に今の時代はお寺に魅力を持たせるといっても、僧侶自身の魅力を磨く方が三離れを少しでも遅らせるのに効果的であろうかと思えます。

今回この二つの行事を始めたのは、ヨガでは女性に、節分追儺式では子どもにターゲットを絞って、これからのお寺の行事に参加してくれるであろう方たちが少しでも仏教に興味を持ち、お寺に来やすい環境を作るのが目的でした。そもそも重きを置いていませんでしたが、新規に檀家になってくれたりする方は三年ほど経ちましたが今のところいません。

ヨガの参加者はヨガを目的に来る人がほとんどです。しかし法話を楽しみに来てくれる人もいます。核家族化が進み、自分が今まで意味は知らないけど両親が昔からやっているからというだけでは信仰の継承は難しく、簡略化されていくのも仕方のないことなかもしれません。しかし、仏教に興味がないかというところでもありません。参加者から自分がやっていることに意味付けが欲しいという声を頂きました。仏さまの教えに興味があっても入口が分からない。入口の場所に導くのも私たち僧侶の使命かと存じます。まだ参加者の多くは入口の前でウロウロしている状態にあるようですので、今後は入ってからの教えを話していきたいと思えます。

田舎の小さなお寺ほど一気に裾野を拡げるのではなく、地道にコツコツと一般の方が参加しやすい行事を進めていくことが大事なのではないでしょうか。そのためにはまず檀家の協力がなくとも始められません。住職だけ張り切って新規行事を始めてみても、嫌々参加してもらおうようでは長続きしないかと思えます。檀家、近所、自治会と少しずつ地盤を固めて、檀家以外の地域の方にも認めてもらえるお寺になれば、小さなお寺でも三離れと戦っていける体力をつけられると信じて、今後も発展させていく所存です。